

以下の記載は、表題の診療ガイドラインから漢方製剤に関する記述を抽出したものです。診療において漢方製剤を使用される場合には、必ず、ガイドライン全体をお読みになり、その位置づけを正しく理解された上で行ってください。

ガイドラインのバージョンは最新のもののみを掲載しています。改定がなされていないガイドラインは、そのまま掲載しています。このガイドラインと其中的漢方の記載を、診療の参考にすべきかどうかの判断は、使用者の責任で行ってください。

抗 HIV 治療ガイドライン 2021 年版

令和 2 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業 HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究班（研究代表者：白阪琢磨 国立病院機構大阪医療センター）

https://hiv-guidelines.jp/pdf/guideline2023_v3.pdf

【現在は最新の 2023 年 3 月版にリンクされている】

■1 漢方薬

疾患:

薬物相互作用

副作用に関する記載ないしその要約:

『Ⅷ抗 HIV 薬の作用機序と薬物動態、3.抗 HIV 薬の代謝と薬物相互作用』に下記の記載がある。『PI や NNRTI は、チトクローム P450 (CYP) の基質であると同時にその活性を抑制 (時に促進) する作用がある。したがって、CYP で代謝される他の薬剤との相互作用が生じる (抗 HIV 薬同士の相互作用については前述)。(中略) 健康食品や漢方薬として市販されているものの中にも相互作用を有するものがあり (セイヨウオトギリソウ St. Johns's Wart が代表的)、注意を要する。』